

出版資料としての布川文庫

柴野 京子

I. 布川文庫の背景

布川角左衛門(1901～1996)は、定年までの約30年を岩波書店の編集者としてすごしたのち、書籍取次の栗田書店(のちの栗田出版販売、現・大阪屋栗田)の役員をしながら、出版関連機関での要職、大学・専門学校での教職をつとめた。出版関係資料として知られる布川文庫は、こうした布川の足跡を色濃く反映する資料群である。

自身がたびたび記しているところによれば、もともと書物の収集を趣味としていた布川は、昭和20(1945)年5月25日の空襲で笹塚の自宅蔵書をすべて焼失した。これを機に集書癖もしばらく封印していたが、戦後を過ごす中で近代出版史への関心と意義を見出し、新たな収集を始めるに至ったという¹。そして、これを推しすすめる契機となったのが、『岩波書店五十年²』(1963年)、『日本出版百年史年表³』(1968年)の編纂であった。

昭和33(1958)年に岩波書店を退職後、布川は岩波とゆかりの深い栗田書店社長、栗田確也(1894～1977)に招かれて、同社小川町別館に布川出版研究室をひらいている。『岩波書店五十年』には社友として加わり、岩波書店の刊行物、岩波書店関係、出版界、内外事情の事項を時系列に併記した本文の中の、出版界年表を担当した。凡例には、出版点数の統計は年代ごとに内務省警保局(1913～1945)、日本出版協会調査課(1946～1949)、出版ニュース社(1950年以降)の調査資料を主に用いた旨が記されている。

『日本出版百年史年表』は、日本書籍出版協会が創立十周年記念事業として企画したもので、昭和41(1966)年に編集作業が開始された。フォーマットは『岩波書店五十年』に準ずるが、内容ははるかに上まわり、膨大な史資料の調査と照合が行われている。同じ項目でも複数の資料が参照されており、出典

¹ 布川角左衛門「集書家の悲哀」『本の周辺』日本エディタースクール出版部、1979. pp.112-116.

² 岩波書店『岩波書店五十年』岩波書店、1963.

³ 日本書籍出版協会『日本出版百年史年表』日本書籍出版協会、1968.

に沿って比較的長い記述がされているのも特徴である。『日本出版百年史年表』は、同協会の五十周年記念でデジタル版を制作、現在ウェブサイトは無償公開されているが⁴、原著が今日のハイパーリンク機能を十二分に活かすコンテンツたりえていることは特筆に値する。

布川文庫の基礎になったのは、この労作のために集められた各種資料である。年表完成後、栗田のさらなる厚意で同社神保町ビルに当面の場所を得たこれらの資料は、通称「布川文庫」と呼ばれて、若い研究者などに開放された⁵。その後、同ビルの改築にともなって次の受け入れ先を探す必要が生じたが、関係者の尽力により昭和55（1980）年に国立国会図書館支部上野図書館（当時。以下、上野図書館。）に仮寄託される。この顚末は「『布川文庫』の始末記」に詳しいが、ちょうどそのころ、日本出版学会による出版資料館の設立が検討されていたことは、出版関係資料と布川文庫を考える上で重要と思われるので、言及しておきたい。

出版資料館は、昭和54（1979）年に十周年を迎えた日本出版学会の構想の一つとして発表された。同学会の設立が『日本出版百年史年表』刊行とほぼ同時期の昭和44（1969）年であることは、日本における出版研究のなりたちを示すものとして興味深い、ここでは多くをふれない。布川は学会設立には相談役のような立場で関わっているが、当初は学会よりも資料室をそなえた研究機関を設置すべきと考えていたようで⁷、念頭には布川出版研究室や文庫の再整備があった。昭和50（1975）年に出版した『出版の諸相』（日本エディタースクール）のあとがきでは、「出版の調査研究に必要な公共的な施設として、いわば『出版資料図書館』を創設したい」とし、「もし、この『布川文庫』がその際の土壌になるならば、私の素志はもちろん、私が物心の両面にわたって微力をつくしてきたことも、将来に向い、発展への路線に生かされると思うが、どうだろうか」と述べている⁸。学会の構想が発表されたのちの昭和56（1981）年3月には、一般には非公開であった上野図書館内の布川文庫に学会関係者を招き、資料の説明などを行って文庫の意義を伝えてもいる⁹。しかしながら、結局は資金や組織運営面のめどがたたず、出版資料館構想の実現は見送られた。

それでも何とか活用の方向性を見出したいという布川の思いを受け、昭和58

⁴ デジタル版日本出版百年史年表

<http://www.shuppan-nenpyo.jp/>（最終アクセス日：2016年8月9日）

⁵ 大久保久雄「解説」日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会『布川角左衛門事典』布川角左衛門事典刊行会発行、日本エディタースクール出版部発売、1998、pp.120-121.

⁶ 「『布川文庫』の始末記」『国立国会図書館月報』（324）、1988.3、pp.22-25。（『布川角左衛門事典』pp.114-119に再録あり）

⁷ 「座談会 回顧と展望」『日本出版学会会報』（36）、1979.3、p.5.

⁸ 布川角左衛門「『あとがき』にかえて―出版関係文庫資料の保存と利用について」『出版の諸相』日本エディタースクール出版部、1975、p.225.

⁹ 「布川文庫を訪ねて」『日本出版学会会報』（43）、1981.3、p.12.

(1983)年には学会内の研究部会として出版資料勉強会が発足している。メンバーだった稲岡勝氏(1943～)の記録によれば、勉強会は原則として毎月第三土曜日の午後にひらかれ、学会外の人も含めて平均15名程度が参加していたという。布川の高齢や会場の都合で平成2(1990)年9月を最後に終了、54回の開催であった¹⁰。いっぽう布川文庫は、昭和62(1987)年11月に正式な寄託契約を締結したのち、上野図書館の改修工事に伴って、国立国会図書館東京本館へ移送され、寄贈の手続が行われた。平成16(2004)年には特別コレクションに指定され、一般公開される運びとなった。

Ⅱ. コレクションの特徴と意義

凡例にあるとおり、布川文庫は和図書、洋図書、逐次刊行物に分類されている。和図書、逐次刊行物に限っていえば、コレクションとしての特徴はおおむね以下の三点に整理できよう。

- ・出版産業史資料としての希少価値
- ・系統を概観できる目録的価値
- ・原装をとどめていることによる形態資料学的価値

《和図書》

大半を占めるのは戦後の資料であり、数としては上野図書館に移転後のものが多い。中には複本もあり、いささか雑多な印象も否めないが、とくに重要なのは一般には入手が難しく、図書館の蔵書が少ない非売品資料であろう。出版社や業界団体等の社史・年史のほか、個人の遺稿集・追悼文集など関係者にのみ配られる私家版(俗に言う饅頭本)は、贈呈先の会議室や個人宅に埋もれてしまいがちであり、古書市場をこまめに見ているのでもなければ、存在すら知られないものが少なくない。レポート類や各種マニュアルはさらに希少で、部数が限られている上に製本が簡易だったり背表紙がつけられていないなどの理由で、古いものはたやすく処分される。布川文庫の場合、布川自身がこうしたさまざまな資料を寄贈されやすい立場にあったこと、なおかつその資料的な価値を理解していたことで散逸を免れた。同様の機関としては全国出版協会・出版科学研究所があるが、会員社のみの利用で所蔵目録がない。布川文庫は一般に公開されている資料群としてかなり貴重なものになっている。

布川が関わった機関は、日本書籍出版協会、日本雑誌協会をはじめ、日本出版クラブ、読書推進協議会、日本図書コード管理委員会、図書券発行母体である日本図書普及などのほか、図書館や大学・専門学校等も含め、きわめて多岐

¹⁰ 山本武利「出版資料館と出版資料勉強会について」『日本出版学会会報』(50), 1983.7, p.3., および稲岡勝「『布川文庫』における出版資料勉強会」『布川角左衛門事典』pp.122-127.

にわたる。出版業界の組織・団体は販売中心であるため、経営者でない編集出身の出版人の活動としては珍しいケースだが、出版社や書店の情報が網羅的に集まる出版取次に籍を置いたことも、資料の幅をさらに広げるのに奏功したのかもしれない。

こうした意味から、布川文庫は年表編纂のための出版史研究という収集目的と、その後の業界における布川のポジションが総合的に体现された資料群であるといえよう。前述のようにコレクションとしての完璧さには欠けるが、本格的な史料から日常に業界内で流通している業務資料、あるいは話題の小説から図書館運動関係史料まで、手の届きうる範囲のものがすべて集約されていることによって、「出版」というテーマの射程の広さを系統的に概観できる利点がある。言い換えれば、雑多であるからこそ、その断片から新たな切り口のヒントを得ることが可能であり、リストを見るたび何度も発見がある。帯など可能な限りそのまま現装をとどめていることも、公的な図書館では稀であり、図書の製作や販売の調査研究に寄与するところである。

《雑誌（逐次刊行物）》

雑誌も戦後の資料が多いものの、和図書と比べて明治期以降、戦前のものが相当数含まれる。本誌にはこれらのタイトルをもとに作成した「布川文庫所蔵雑誌創刊年順目録」が掲載されているが、それとは別に実際に所蔵する年号の古いところから5年きざみでタイトル数を集計し、分布状況を調査したのが図1である。ただし刊行年が不明なもの、判定の難しいものは除き、複数年月にわたって所蔵するものも1点と数えた。

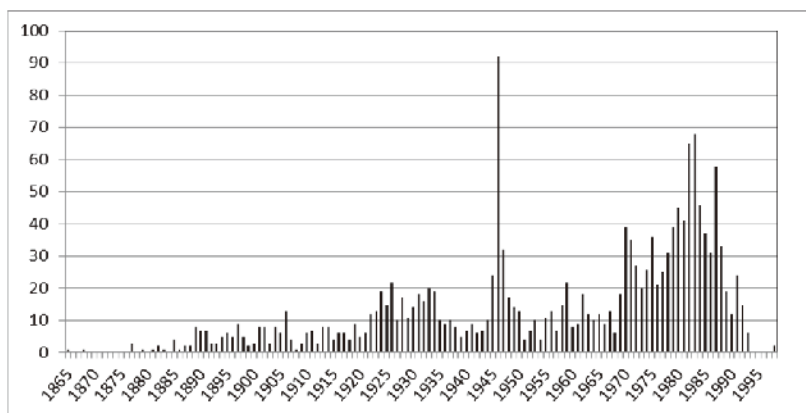


図1 布川文庫所蔵逐次刊行物年代分布状況

内容面では、やはり出版関係の専門誌が注目される。近代では最初の同業組合である東京書籍商組合発行の『図書月報』、同じく最古のPR誌といわれる丸善の『学燈』、博文館が設立した大手流通会社、東京堂の『東京堂月報』、といった基本的な雑誌も一定量そろっているが、『新潮社出版月報』（新潮社）、『雑誌論調』（内閣情報部）など、他館にほとんど所蔵がないものはいくつかみられる。戦後においても、出版関連企業の社内報や組合の文集など、ほぼ入手困難なものが混ざっている。わざわざ入手したというよりも、送られてきたものが「混ざった」というのが適切と思われるが、外部に出ることの少ないこうした冊子は、内容のみならず「そのような活動があった」こと自体が研究対象になりうるという点で、一次資料の価値がある。

Ⅲ. 雑誌創刊号コレクションとしての特色

布川雑誌資料のポイントとしては、もうひとつ約750タイトルに及ぶ創刊号があげられる。布川文庫にゆかりの深い出版史家の大久保久雄氏（1931～）によれば、布川文庫の創刊号は布川が収集したもののほかに、かなりの部分を在野の研究家でコレクターの山崎安雄（1910～1964）から譲り受けているという¹¹。ただし、現状ではどのタイトルがそうであるのかを判別することは難しい。

今回この稿を起こすにあたり、これらの創刊号から年次を確定できた約750点を他機関が所蔵する7件の雑誌創刊号コレクションと比較してみた。本来はタイトルと巻号で照合すべきところだが、所蔵機関によって書誌のフォーマットがまちまちであることから断念し、布川文庫の雑誌年代分布状況に同じく、刊行年次で傾向を概観することとした。元データは各機関がウェブサイト公開しているものを用いたが、詳細が不明なものやファイル変換でエラーが出たものは除外している。また、東京都立多摩図書館については、昭和から平成14（2002）年までのデータが提供されていない。

所蔵タイトルを5年きざみでグラフ化してみると（図2、図3参照）、布川文庫の創刊号は終戦直後と1980年代にピークがあるものの、全体の中ではまんべんなく分布しているのがわかる。以下にその結果と各コレクションの概要を示すが、布川が在籍した岩波書店と栗田書店が名を連ねていることは注目されよう。とくに岩波書店が所蔵する雑誌創刊号は非公開で、後述する展覧会関係を除いてまとまった記録がないため、やや詳しく記しておく。

¹¹ 大久保久雄、前掲論文（註（5））p.120。山崎安雄は1913年に毎日新聞入社、出版局などに勤務しながら『岩波文庫物語』白風社、1962などの著作を出版した。

・岩波書店・雑誌創刊号コレクション

岩波書店一ツ橋ビル別館地下に約2,900タイトルを所蔵。もとは旧館図書室に保管されていたが、スペースが広がった新社屋の図書室（現・資料室）で初めて排架されたという。平成12（2000）年前後に同社員（当時）の桑原涼氏がその稀少性に気づき、旧知の学芸員であった森仁史氏（現・金沢美術工芸大学柳宗理記念デザイン研究所シニアディレクター）を通じて、平成16（2004）年にうらわ美術館で展覧会「創刊号のパノラマ―近代日本の雑誌・岩波書店コレクションより」が行われた。桑原氏によれば、同社専務で雑誌資料に造詣の深かった長田幹雄（1905～1997）が、蒐集したものだと言いつたてられてきた。コレクションの4割程度に「津田」という古書店の印があり、図書カードの整理状態やラベルの貼り方から推測すると、戦後まもない時期にまとめて購入したものを核として拡充されたのではないかとみられる。これらは同社『近代日本総合年表』（1968年）初版編集時に創刊誌のデータとして参照した後は、ほとんど活用されることがなかったとみられる。目録・資料とも非公開だが、岩波書店から刊行された展覧会のカタログに主な雑誌の表紙が掲載されている¹²。なお管見の限り、このコレクションについての布川の言及はみられない。

・北海道立図書館・栗田文庫

同館の旧来からの所蔵と各所からの寄贈による28,706タイトルのうち、創刊号1,088タイトルを目録化している¹³。中には栗田確也が昭和50（1975）年に寄贈した個人コレクションが含まれ、栗田の死後も、栗田出版販売が2015年に民事再生法を申請するまで、雑誌の寄贈は続けられた。なお栗田書店はこれに先立ち、昭和27（1952）年に開設した新刊図書の展示施設「栗田ブックセンター」の蔵書を、少なくとも4回にわたって同館に寄贈している（「栗田文庫」として現存）。

・東京都立多摩図書館・東京マガジンバンク

国内有数の雑誌専門図書館で、創刊号約6,300タイトルのうち2,000タイトルは「仙台文化」編集人で出版史研究家の渡辺慎也氏の寄贈による。明治・大正期および平成15（2003）年1月以降に創刊されたものについてはウェブサ

¹² うらわ美術館・岩波書店編集部『創刊号のパノラマ―近代日本の雑誌・岩波書店コレクションより』岩波書店、2004。本稿に当たっては特別にデータを借用した。

¹³ 北海道立図書館創刊号所蔵雑誌創刊号目録
<https://www.library.pref.hokkaido.jp/web/publish/qulnh000000006rv-att/qulnh0000000028gs.pdf>（最終アクセス日：2016年9月1日）

イト上にリストを掲載¹⁴。昭和期から平成14（2002）年までのリストは、プリントアウトしたものを館内で閲覧できる。渡辺氏寄贈分はリスト上に「華」の記載がある。

・ **神奈川県立図書館・雑誌創刊号コレクション**

1,572タイトル（2011年3月31日現在）。昭和42（1967）年に川崎市立産業文化会館で開催された「雑誌にみる明治百年展」を契機に、それまで所蔵していた雑誌の創刊号をコレクションとして位置づけ、収集を開始。目録はウェブサイト上で公開している¹⁵。

・ **法政大学多摩図書館・雑誌創刊号コレクション**

平成26（2014）年10月現在で3,357タイトル。平成10（1998）年に東京都在住の柴田育郎氏より寄贈されたコレクションをもとに収集。ジャンルは幅広く、目録はウェブサイト上で公開している¹⁶。

・ **学習院女子大学図書館・高橋新太郎文庫**

国文学者で学習院女子大学名誉教授の高橋新太郎（1932～2003）による雑誌コレクション。このうち創刊号は約1,500タイトルに及ぶ¹⁷。

・ **大宅壮一文庫雑誌創刊号コレクション**

大宅壮一生誕100年でデジタル画像化されたCD-ROMの604タイトル。出版企画として整備されたものであり、時期は明治・大正期に限定される（同文庫所蔵の創刊号を網羅しているわけではない）¹⁸。

¹⁴ 東京都立多摩図書館 東京マガジンバンク
<http://www.library.metro.tokyo.jp/tabid/437/Default.aspx>（最終アクセス日：2016年9月1日）

¹⁵ 神奈川県立図書館 雑誌創刊号コレクション
https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/collection/kpl_collection08.htm（最終アクセス日：2016年9月1日）

¹⁶ 法政大学多摩図書館
<https://www.hosei.ac.jp/library/collection/tokushoku/index.html>（最終アクセス日：2016年9月1日）

¹⁷ 学習院女子大学図書館 高橋新太郎文庫創刊号コレクション
http://www.gwc.gakushuin.ac.jp/library/docs/takahashi_list_2.pdf（最終アクセス日：2016年9月1日）

¹⁸ 大宅壮一文庫創刊号コレクション
<http://www.oya-bunko.or.jp/possess/tabid/79/Default.aspx>（最終アクセス日：2016年9月1日）

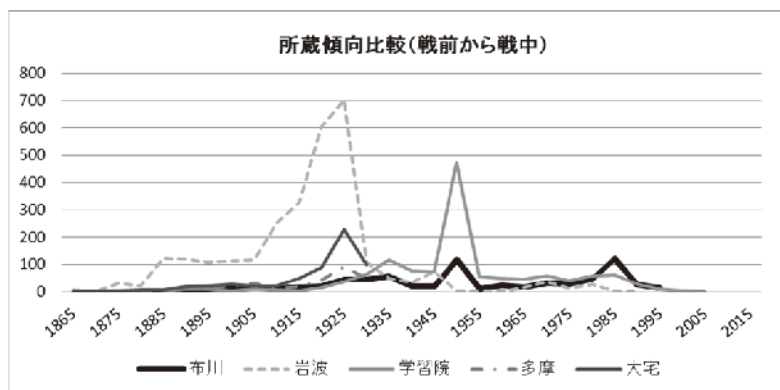


図2 雑誌創刊号コレクション比較1（戦前から戦中の所蔵の多いもの）

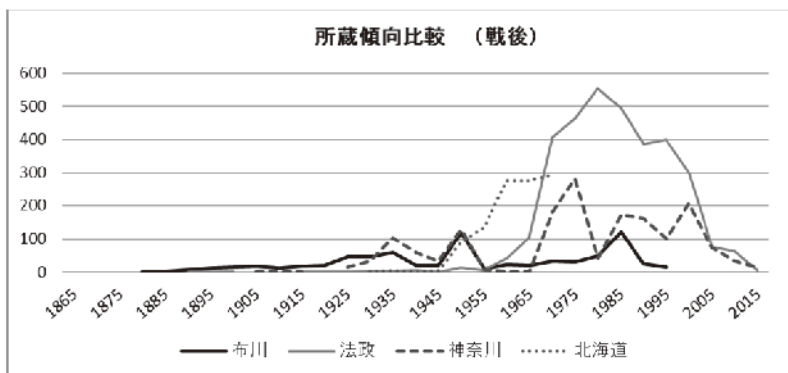


図3 雑誌創刊号コレクション比較2（戦後の所蔵が多いもの）

Ⅳ. 課題と展望

平成28（2016）年3月に所蔵リストのPDFファイルが公開されて、布川文庫へのアクセスは格段に向上した。加えて本誌掲載の雑誌目録と索引は、出版研究者に限らず雑誌を研究に利用しようとする人に向けて、大いに利便を与えるものになるだろう。しかし最終的にはやはりNDL-OPACまたは国立国会図書館サーチに組み込む形で検索ができることが望まれる。目録を丹念に拾うのが文献調査の基本動作であることに異論はないが、同じ機関に所蔵されているものが電子目録に含まれないというのは、デジタルネイティブ世代や海外の研究者にはわかりにくく、資料にとってあまり幸福なことではない。

あわせて著作権処理がクリアできそうなものについてのデジタル化も期待し

たい。たとえば博文館発行の『図書世界』はすでに国立国会図書館デジタルコレクションとして館内限定で提供されているが、欠号の一部が布川文庫の中に含まれている。

資料保存の観点からは、出版関係や創刊号のような意味づけが明確でない、一般資料の問題がある。一例をあげれば、和図書の中にある『Santa Fe 宮沢りえ』（朝日出版社、1991）は、当時のトップアイドルのオールヌードを篠山紀信氏が撮影してミリオンセラーを記録し、社会現象ともなった写真集だが、そうした背景を知らなければ収集の対象とした意味がわからない。こうした時代の記憶が時とともに失われるのは必定で、個の関心が細分化していく中での継承はなお困難である。じつは布川文庫所蔵の同書には、帯とともに、宮沢りえ現象、台湾での海賊版出版、高校図書館の購入是非問題、篠山氏による連載エッセイなど、収集意図を示す6種類の新聞記事がはさまれているのだが、残念なことに情報として整備されるには至っていない。

前出の大久保久雄氏は、布川の晩年、療養のため急遽改修することになった布川邸から本をすべて運び出した際、独自の分類で積まれていた「本の山」を、入院中の布川に断りなく崩さざるを得なかった無念を『日本古書通信』に記している¹⁹。完全な復現は無理としても、収集の背景を可能な限り補っておくことは、われわれ文庫の恩恵を得る者の宿題である。

最後に、もっとも重要な事項として出版資料のネットワーク化がある。布川文庫の限界は、他の所蔵機関とのネットワークによって補いうる。『日本出版関係書目²⁰』は、上野の布川文庫で活動していた研究者たちが、同文庫の目録作成に続いて、公共・大学図書館および企業の資料室などを悉皆調査して作成した目録であり、『日本出版百年史年表』とならんで出版研究には欠かせないレファレンス資料の一つになっている。次の世代に課されているのはこうした先人の仕事に応じて研究を充実することと、デジタル・ネットワークを利用して、有益な資料環境を構築することであろう。布川文庫の意義は、コレクションとともに、出版資料のありかたを問うものでもある。

本稿執筆にあたり、桑原涼氏、北海道立図書館をはじめ関係各所の方々に多大なご協力をいただいた。この場を借りて心から感謝を申しあげたい。

¹⁹ 大久保久雄「布川蔵書の整理—布川角左衛門先生を偲んで」『日本古書通信』61(3), 1996. 3, p.13.

²⁰ 布川角左衛門監修・浅岡邦雄ほか編『日本出版関係書目』日本エディタースクール出版部、2003.

参考文献

- 稲岡勝「『日本出版関係書目』の刊行と出版研究—出版研究の基礎資料の編集にあたって」『出版ニュース』1991, 2003.12. pp.6-9.
- 岩波書店『岩波書店五十年』岩波書店, 1963.
- 大久保久雄「布川蔵書の整理—布川角左衛門先生を偲んで」『日本古書通信』61 (3), 1996年3月, p.13.
- 「栗田出版販売七十五年史」編集委員会『栗田出版販売七十五年史』栗田出版販売, 1993.
- 小林恒也『出版のこころ—布川角左衛門の遺業』展望社, 2011.
- 中村由美子「神奈川県立図書館の『雑誌創刊号コレクション』」『神奈川県立図書館紀要』10, 2013.2. pp.69-89.
- 日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会『布川角左衛門事典』「布川角左衛門事典」刊行会発行・日本エディタースクール出版部発売, 1998.
- 布川角左衛門『出版の諸相』日本エディタースクール出版部, 1975.
- 布川角左衛門『本の周辺』日本エディタースクール出版部, 1979.
- 布川角左衛門「布川文庫のこと」『日本古書通信』50 (5), 1985.5, pp.4-5.
- 布川角左衛門監修・浅岡邦雄ほか編『日本出版関係書目』日本エディタースクール出版部, 2003.

(しばの きょうこ 上智大学准教授)